

13—おむつは命

尿とりパットと布おむつ併用へ

相談員・三浦恵美子

任運荘は昭和五十年開所と共に布おむつ使用の徹底随時交換で出発し、全国的に思わぬ高い評価を受けました。重度化に伴い悪戦苦闘しても三十分以内の交換も四十五分、やがて一時間近い所まで後退を余儀なくされました。十五年めの平成二年半ばから尿とりパットと布おむつ併用に変え、随時交換の一層の合理化にふみきました。その半年の経過効用を記します。

紙おむつに罪なし

病院等から紙おむつ使用で任運荘に入居してくる多くのお年寄りに、発赤や床ずれ、お尻全体の皮膚が黒褐色に変化しているなどの症状がみられます。明らかに紙おむつ使用によるものです。しかしそれは紙おむつの罪ではなく、安易なおせわの手抜きの方法として、紙おむつが使用された結果です。稀には、体質的にかぶれたりして紙おむつのあわない人もいます。現在、

いつまで続くかわからない長期間の停電と断水で、一時的であれ、尿取りパットの使用を余儀なくされたのです。試用第一夜が明けて、夜勤者の報告は、「おむつ交換に時間がかからない」「おむつ交換時に、アンモニア臭がない」等使用結果は良好でした。さっそく全員で検討会。一週間、お年寄りに使用してみることになりました。その結果、一人を除いておむつかぶれらしい症状はみられません。驚いたことに常時失禁状態に近いSさんMさんにとっては好結果でした。おむつ使用者の中には、SさんやMさんのような、常時失禁状態の人が数名いますが、SさんMさんは特に皮膚が弱い。そのため、今まではお尻が赤くふやけたようになり、ジクジクしていましたが、尿とりパットの使用によりお尻がサラツとしてきました。尿とりパットは床ずれの原因にはなりません。全寮母の一致した尿とりパット使用の感想は、「おむつ交換が素早くできる」「臭いが出ないので悪臭予防になる」「表面がサラツとしていて濡れた感じがないため、お年寄りに不快な思いをさせないですむ」と好評です。紙おむつの使用も念のため、同時に行いましたが、三時間おきの交換には勿体ないという結論です。だからといって三時間以上も交換時間を、延長することは好ましくなく、また資源保護の点からもムダ使いは避けねばなりません。

原則として紙おむつは使用しないことになりました。ですから、布おむつと尿とりパットの併用です。

自分でためしてみた

たしかに尿とりパットは便利でした。しかし、おせわする側からの利点のみで切りかえるのであれば問題です。私たちがまず、実際に着用し、排尿し不快度を調べてみることにしました。排尿後の感じはどうか。つまり、不快感許容範囲内はどうか重要な点です。あてた感じは冷たさもなく、ゴワゴワした違和感はありません。排尿直後は尿の温かさを肌にもろに感じ、気持ちの良いものではありません。しかし体温と同一化してしまえば、それも感じなくなります。時間が経っても変わりなく、冷たさを感じることはありません。

布の場合は、少量の尿でも布にしみわたっていくので、ぬれた部分が広がっていきます。どんなに短時間のうちに交換していても、濡れたおむつにお尻がくるまっている不快さは変わりません。尿とりパットは単にチリ紙を何層にも重ねて水分の吸収をするのではなく、排尿された尿が化学反応によって、ゼリー状にかえられますので、肌に当たる表面はサラッとしています。多量であったり、長時間そのまま放置の場合はそうはいきません。

快適さを基準に

私たちの行った実験では、二百CCサイズのものであれば、一回の排尿が五十CC～百五十CC位までなら、三時間以上経っても表面はサラッとして濡れた感じはありません。しかし、排尿が二百CCになると、少しですが湿気を肌に感じます。布の場合は、尿量の多少にかかわ

らず、濡れた部分がベタベタして不快です。私たちは、一時間おきの布おむつ交換よりも、その人に応じて一時間半～三時間ていどの尿とりパットと布おむつ併用のおむつ交換の方法を選びます。

お年寄りにとっても快適、寮母にとっても便利、双方にとってよいこと、それこそ本当の合理化です。理事長・吉田は「いまや、任運荘にとって合理化は最高の倫理だ。重度化は進む一方、職員配置基準はいぜんとして劣悪だから」といいます。紙おむつを安易に使用するのではなく、あくまで布おむつと尿とりパットの併用です。しかし、尿とりパットの当て方が悪かったり、一度の排尿量が尿とりパットの許容量（現在使用中の物は二百CCのもの）を越えると、布おむつにこぼれ出ることがあります。その時は早めに取り換えます。利尿剤服用の場合や排便の時も、もちろん同様です。おむつ交換のたびに高温殺菌されたタオルで清拭を行うことはいうまでもありません。

三時間経つても、また、換えても捨てない場合もあります。少量の排尿であれば、濡れていない部分をずらしてもう一度使います。男性の場合も二度つかえるよう当て方を工夫し、目一杯使用します。

随時交換の心

お年よりからその使用感を聞くことは出来ません。重度化して、その反応が分からないからです。

Mさんは布おむつの場合時々おむつカバーを外していましたが、そういう時はおむつが濡れている時でした。今はそういうことがみられなくなりました。排尿の不快感がなくなったためです。また、夜間何度もおむつ交換で、起こされることもなく安眠できるようです。排尿も遠くなりました。従来は夜間八回のおむつ交換でした。徘徊者がいたり、重症者がいてもゆとりある気持ちで、おせわにあたれるようになりました。

重度化した利用者と、やはり重度化したショートステイ利用者の増加でおせわにかなりの時間をとられます。また、私たちは、ふつうのくらしの実現のために、おせわの目標としてこれまで幾度か申しました六項目を日々のおせわに実践しています。

この六項目の実現を尿とりパットと布おむつとの併用で、かろうじて充たしています。日中も少しはゆとりが出来、リハビリ、レクリエーションにまわせるようになりました。

理事長はいいいます。「率直に言っただけでも従来からの任運のやってきた仕方は美しいと思っただけ。しかし、状況が変化すれば、その時にあった一番よいおせわを努力工夫することである。それが自然、その意味で自然が一番よい」。

布おむつ使用から、尿とりパット併用という変化はあっても、「おむつはいのち」という基

本精神に変化はありません。「このごろ、ちっとも来てくれんことなつたなあ」とKさん。無口なKさんのことばであるだけに考えさせられます。寝たきりのKさんにとっては、頻繁に訪れていたおむつ交換は、大切なコミュニケーションでもあるのです。おせわとは人間対人間の関わりあいです。心の面の充足も同じく重要です。

寮母の意見

お年よりの必需品すべてに利点

布おむつばかりだと、全体的にぬれるが、パット使用をするとその部分だけで止められ不快感が少なくすみます。床ずれ予防にもなります。少し、心に余裕のある仕事が出来るようになりました。

パットにすると、布おむつ使用のときよりも利用者は熟睡出来る。布おむつの量が少なくすむので、汚れ物の処理が早くできます。尿とりパットを正しい位置に使用することが必要です。

(寮母・佐藤ヨシ子)

昨年七月の集中豪雨を機に、尿とりパット使用を夜だけでもと、遠慮がちに事務長に申し出

ると、意外にも、夜昼、使つてよいと言われて、私のほうが戸惑いました。寮母会議を何度も開きよく話し合いました。開所当時から三十分以上は、濡らさない布おむつ随時交換を続けてきただけに話はなかなかまとまらず、まず、やってみようと不安の中から始めました。職員自身自分で使用してみました。たとえ多量の尿が出て肌からはなさない、不快感がないことも分かりました。

二時間ぐらいの交換で始めたが、漏れた感じが少なく、もったいないので三時間おきの交換もあります。交換時には熱いタオルで清拭やをする余裕もできました。（それまでは布おむつの乾いた部分で拭いていました。）臭みもなく、尿とりパットだけの交換なので仕事も早く、寒い時など、度々布団を上げなくてよいので尿間隔も長くなりました。従来のおむつ交換の時間を、レク、リハビリ、戸外散歩、旅行等に向けていけます。一時預かりが増え続けていますが、介助人員は増えませんので、これですいぶん助かります。布おむつ洗濯も減って洗濯当番の負担も軽くすることができました。今、尿とりパットに皮膚が負ける人一名は布おむつ使用で、従来通りの随時交換です。

（当時寮母主任・田近昌子）

常時おむつ使用の小倉ハツさんは、布おむつの時は、交換する度に、「眠るらせん（眠れない）」と怒っていました。パットになってからは嫌な顔はしません。三十分以上ぬらさないと書いていた頃は、精神的にあせりがありました。早くおむつを換えないとお尻だけでなく衣類

や布団をぬらすからです。尿だけならまだしも、排便でもあつたらと思うと尚更です。

時間を気に掛けながら、交換していただきましたので、ナースコールが鳴るとよけいにその思いはつのりません。しかし、もうあせりはありません。何よりもよいことは清拭をしてあげられることです。夏場は特にお尻の発赤や、臭いが気になります。パットにしてよかったと思つていきます。

(寮母・松岡美洋子)

昨年七月二日、集中豪雨の時です。停電はいつ終わるか分からない。その第一日目は私とMさんが夜勤でした。真っ暗な中を懐中電灯のあかりで初めて使用するパットを、慣れない手つきで、布おむつを濡らさないように努力をしました。このような状況の中で感じたこと。

停電で換気扇も動かない、窓も開閉できないのに悪臭を感じない。尿量の多い人でも尿取りパットだけで十分だった。布おむつに比べ尿とりパットは短時間で取り替えができる。寒い時にはとくに効果的。布おむつだけだと濡れたら尻部全体が湿って、不快感はおろか油断をする。発赤の原因になるが、尿とりパットだとサラツとした感じで快適である。

(寮母・後藤明子)

布おむつはどんなに随時交換しても濡れたら時間がつれ冷たく、悪臭を放つ。テストの結果、尿取りパットは冷たさを感じない、さらつとしている。それは時間がつれゼリー

状に変化して濡れない。

布おむつ使用の時、あるお年よりは「二回換えるところを、一回の割りにしてほしい。ゆっくり眠れないから」と訴えていた。しかし、今は長くてもほぼ三時間以内、その方は今は「ゆっくり眠れる」と喜ばれている。このようにお年よりの快適さと便利さを思うと、紙おむつが世界的に禁止されるまでは続けたいとつくづく思う。地球愛護を考えると、割り切れないものが重く私たちにのしかかるのをどうしようもない。

(寮母・佐藤文枝)

紙おむつと自立の問題

全社協季刊『老人福祉』（八九号）は「紙おむつ特集」をし、49施設の回答を得て、問題点として次の7点をあげている。

①肌がかぶれる ②肌がむれる ③処理が困難（捨て場所か？） ④周囲からモレる ⑤便の処理が不便 ⑥ぬれを感じないので、おむつ外し意識がうすれてしまう。

①～⑤まではおむつを、お世話する側の都合一本槍でしているから、そんな欠点を生ずるのであって、紙おむつの罪ではない。長時間換えなければ当然そうなる。

⑥は一考を要する面もある。熊本市・慈愛園乳児院（潮谷義子院長）では昼間は布おむつ、夜間は紙おむつ。指摘しているように紙おむつは不快を訴えないので、おむつよりの自立がはっきり遅れるからである。（ついでに、布おむつをリリースにしていたが、疑わしいので使用前に

洗ったら、黒い汁がたらたら、すぐに中止、自家洗濯に。」

乳児にとっては、たしかに紙おむつの快適さはおむつ外しを遅らせるが、老衰した人たちにその不快さを味わせてまで、おむつ外しを強要する必要があろうか。そうは考えない。安らかな日々、気持ちのよい時間こそ至上のものである。

参考のために大分県下全特養ホームの紙おむつ等使用状況調査を任運荘がした結果を次表に示そう。

大分県下特養の紙おむつ・尿とりパット使用状況

(任運荘調査 H2・9・30現在)

項 目	施設数	定 員	おむつ使用者数	平均おむつ使用者率
① 今後も布おむつのみ使用を続ける	4	50 ~ 150	18 ~ 70	50.7%
② 場合によっては紙おむつ使用を考えている	5	50 ~ 80	50 ~ 62	65.3%
③ 昼夜を通して紙おむつのみ使用	0	—	—	—
④ 夜は紙おむつ、昼は布おむつを使用	8	50 ~ 100	21 ~ 65	57.2%
⑤ 紙おむつと布おむつを使用	3	80 ~ 150	46 ~ 90	56.7%
⑥ 布おむつと尿とりパットを使用	8	50 ~ 100	21 ~ 60	57.4%
⑦ 夜は紙おむつ、昼は布おむつと尿とりパット使用	3	50 ~ 100	21 ~ 46	45.2%
⑧ 布おむつ、紙おむつ、尿とりパット併用	7	50	15 ~ 30	52.7%
⑨ 夜のみ紙おむつ、尿とりパット使用	1	90	50	55.6%
⑩ 行事・外出の時のみ紙おむつ(尿とりパット)使用	2	50	30 ~ 31	61.0%
計	41	2,840	1,590	56.0%

※ 大分県下41施設中全回答あり

(注1) 項目②の「場合によっては紙おむつ使用を考えている」は、5施設になっているが、将来は紙おむつのみを使用を考えている施設が他に5施設あった。

(注2) 項目⑥の「布おむつと尿とりパットを使用」は8施設中1施設は任運荘。

(注3) おむつ使用者率は1施設の最低が30%、最高が77.5%。41施設中50%以下は10施設であった。